

CONTENTS NIHONGO-KYŌIKU TSŪSHIN No. 57/JAN 2007

- 表紙・特集 1
海外日本語教師の再教育から学んだこと
～「国際交流基金 日本語教授法シリーズの
発刊」に寄せて～
日本語国際センター 専任講師 久保田 美子
- 日本語の教え方イロハ 第3回 4
会話
- 授業のヒント 6
教室で写真を使う
- 新聞・雑誌から見る現代日本 第25回 8
STOP 飲酒運転 代行業者 大忙し
- 本ばこ (新刊教材・図書紹介) 11
- 文法を楽しく!! 第7回 14
「～て～」(2)
- KC (関西国際センター) 研修生の
Nipponレポート 第7回 16
日本の高校に行きました

※ 本誌で、ルビが文字の下に付いているのは、紙や物差しなどでルビを隠して、漢字の読みの練習ができるようにするためです。

海外日本語教師の再教育から学んだこと

～「国際交流基金 日本語教授法シリーズの発刊」に寄せて～

日本語国際センター 専任講師 久保田美子

国際交流基金では、2006年度より「国際交流基金 日本語教授法シリーズ」の発刊を始めました。このシリーズは、国際交流基金日本語国際センターで1989年の開設以来行われてきた海外日本語教師のためのさまざまな研修を通して、そこで得られた考え方や経験



をもとにつくられたものです。この記事では、このシリーズ発刊の意味と、このシリーズに込められている教師の再教育に対する考え方をお伝えいたします。

On the Web

http://www.jpfi.go.jp/j/japan_j/publish/tsushin/index.html

以下の記事はJFのウェブサイトのみにてご覧になれます。

- 日本語・日本語教育を研究する 第31回
日本語特殊拍の習得に関する研究
早稲田大学大学院日本語教育研究科教授 戸田 貴子
- 授業に役立つホームページ 第16回
Web2.0と日本語教育(1)
—ブログの活用—
- 海外日本語教育レポート 第14回
カナダ・アルバータ州の初等・中等教育に
おける日本語教育カリキュラム
カナダ・アルバータ州教育省日本語アドバイザー
(国際交流基金派遣専門家) 室屋 春光
- にほんごハローワーク 第7回
尺八を通して異文化を融合させる
ブルース・ヒューバナーさん
琴古流尺八・フルート奏者(出身:アメリカ合衆国)

1. 「国際交流基金 日本語教授法シリーズ」発刊の意味

現在世界の日本語学習者数は、日本国内で約13万人^{注1}、海外では250万人を超えています。そして、海外の日本語教師の数は約3万3千人で、そのうち約7割が日本語を母語としない日本語教師です^{注2}。つまり、日本語学習者の大半は海外の学習者であり、また、その教育の大半は、日本語を母語としない日本語教師によって支えられていると言えます。

しかし、現在出版されている日本語教師のための教材を考えたとき、そのほとんどが、日本国内で日本人によって利用されることが前提になっていることは否めません。そしてさらに、これから日本語教師を目指す人たちのための知識提供型のものが多いということも事実です。我々は、重要でありながら、焦点のあてられてこなかった「海外で日本語を教える教師」、さらに「日本語を母語としない教師」を視野に入れた教授法教材を作成しました。さらに教師研修での経験を生かして、知識を提供するだけでなく、「日本語教師に必要な基本的な姿勢や力を身につける」ことも目指した教材になっています。以下にこれらの点について説明します。

① 海外で日本語を教える教師のための教授法教材

日本国内で日本語を教える場合と、海外で日本語を教える場合は、何が異なるのでしょうか。一番大きな違いは、学習者にとって日本語が、住んでいる国で実際に使われていることばか、住んでいる国では使われていない「外国語」であるかという違いです。この違いは、学習者の意識や、実際に日本語に触れる機会の質や量に影響し、また、教師が利用できる教材や素材の質や量にも影響

『日本語教育通信』 第57号

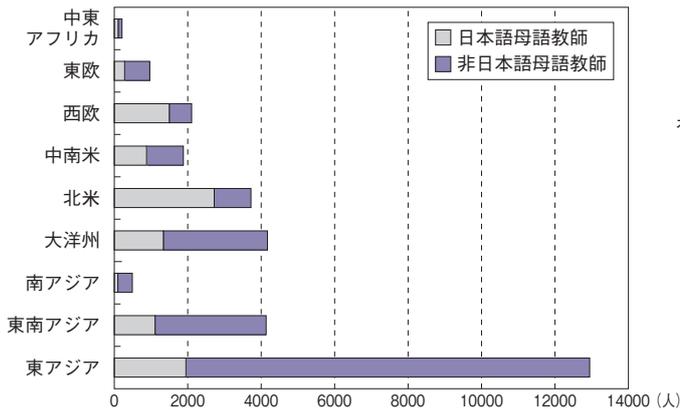
2007年1月発行

編集・発行 国際交流基金 日本語グループ
〒107-6021 東京都港区赤坂 1-12-32
アーク森ビル 21F
TEL. 81-3-5562-3525 FAX. 81-3-5562-3498
E-Mail. jfnct@jpf.go.jp
編集協力
株式会社アーバン・コネクションズ

■ 地域別日本語教師数

ちいきべつ にほんごきょうしすう

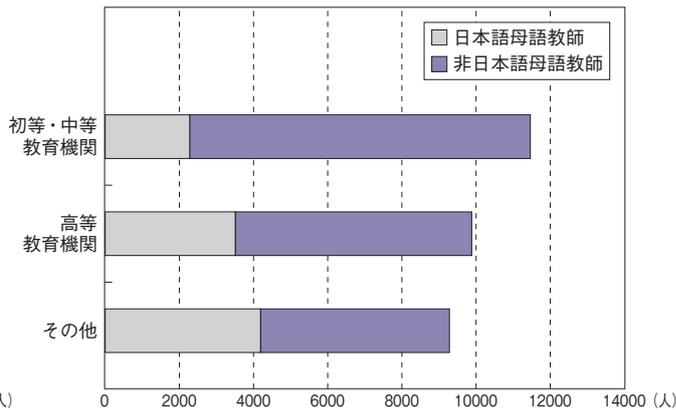
(海外日本語教育機関調査・2003年調査結果に基づく)



■ 機関別日本語教師数

きかんべつ にほんごきょうしすう

(海外日本語教育機関調査・2003年調査結果に基づく)



します。教授法教材を考える上で、こうした面も充分考慮する必要があります。この教授法教材シリーズは、こうした「外国語」として日本語を教える場合も想定してつくられています。

② 日本語を母語としない教師のための教授法教材

日本語を母語とする日本語教師が「日本語」を分析するとき、自分はどのようにことばを使っているか考える「内省」という方法をとることができます。日本語を母語としない日本語教師の場合には、そうした方法をとることは難しいですが、自らが学んだ経験を持つ、あるいは、いつでも学習者の立場になれるということが、教え方を考える上で大きな利点となっています。そうした点を踏まえ、日本語を母語としない教師にとって、一つの課題をどのような課程で考え、解決していけば有効なのかも考えました。例えば、実際に学習者に与える課題を、まず自ら体験してもらうことによって、学習者としての「発見」や「達成感」などを思い出してもらい、それを自分の教え方に応用してもらったりします。また、この教授法教材シリーズでは、できるだけわかりやすい日本語の文章で説明することを心がけ、漢字の負担も少なくなるように配慮しています。

③ 教師として必要な基本的な姿勢や力を身につけるための教材

前述の通り、国際交流基金日本語国際センターでは、開設以来約17年にわたって海外の日本語教師研修を行ってきました。この間、当センターで研修を受けた研修生は、延べ数で6500人を超え、その出身地域は、90か国以上になります。研修は約2か月の短期研修、約6か月の長期研修、さまざまな国の教師が集まった研修、一つの国の教師を集めた研修など、さまざまな種類があります。内容としては、「日本語」「日本語教授法」「日本事情」の三分野の中から、それぞれの分野で、できるだけ新しく、普遍的で、なおかつ共通に認識できるものを取り上げています。

そして、17年間の経験を通して我々が学んできたことは、単にそうした分野の知識や情報を提供するだけでは、それを帰国後に実際に生かしてもらおうと考えた場合、不十分な場合もあるということでした。そこで日本語国際センターの研修では、新しい知識や情報を応用していく上での基本的な姿勢や能力をも養うことを目標とするようになりました。具体的には次のような姿勢や能力です。

自分で考える力

新しい理論や知識に接したとき、受身的にならず、自分で考え、理解し、納得してから吸収することが必要であると考えます。

客観性、柔軟性

現職の教師は、時として、自分のこれまでの考え方や教え方にとらわれてしまっていることがあります。新しい考え方や、他の教師の意見に耳を傾け、その内容を客観的に理解し、時には柔軟に受け入れる姿勢や能力もまた必要であると考えます。

現実を見つめる視点

新しい理論や知識を、自分でよく考え、柔軟に取り入れることができるようになったとしても、それをすぐに自分の教育現場で生かせるとは限りません。自分自身の環境や、自分の特性や能力など、現実を正確に把握した上で、利用したい理論や知識をどうすれば生かすことができるのか、現場に合った適切な方法を見つける姿勢や能力も必要だと考えます。

研修後も自分の力で成長し続けることのできる力

海外の日本語教師の場合、現場に戻ると、日本語教師が自分一人である場合も珍しくありません。研修中のように、すぐに相談できる講師やクラスメートがいるわけでもなく、孤軍奮闘しなければならない現実が待っています。たとえ一人になっても、常に新しい情報を取り入れ、学び続け、自分自身で課題を見つけ、成長し続ける姿勢を身に付けることが必要です。

教師にとって必要なこれらの基本的な姿勢や能力に対する考え方は、1990年代以降、日本語教育の分野でも盛

んに言われるようになった「教師トレーニング」から「教師の成長」への考え方の変化、その中で出てきた「自己研修型教師」「内省的実践家」と呼ばれる教師モデルの理論にも裏打ちされ、日本語国際センターにおける教師研修の根底を支える考え方となりました注3。

研修では、このような基本的な姿勢や力を身に付けさせるために、新しい理論や知識を提示するだけでなく、クラス内でのディスカッション、グループ活動、模擬授業などを通して、自らのそれまでの教え方を振り返り、他の研修生の意見を聞き、さらに実際に体験するなどして、新しい考え方、教え方の背景にある意味やその効果について考えられるようにしています。また、学校の方針、現在とられている教授スタイルや学習スタイル、学習者のニーズなどをもう一度見直し、思い込みはないか十分に再検討し、その上で、新しい考え方を現場に適用することが可能か、可能にするために自分がしなければならないことは何かを考えます。さらに、必要な情報の取り方、ネットワークや教師同士の学びの場を形成することの必要性などについても考え、研修後も学び続ける上で必要なことを考えます。

こうした研修における実際の取り組みをこの教授法教材シリーズの中でもできるだけ再現するよう工夫しました。そうした工夫を理解していただくため、次にこの教授法シリーズの構成について説明します。

2. 「国際交流基金日本語教授法シリーズ」の構成

この教授法教材シリーズの中にはさまざまなコーナーがあります。その順番やアプローチの仕方はテーマによって異なりますが、いくつか代表的なコーナーについて説明します。

① 振り返りましょう

このコーナーでは、自分自身が実際に行っている言語活動や、自分自身が現在行っている教え方を振り返り、客観的にみつめなおすことができるような課題が提示されています。

② 考えましょう

振り返った内容に関連する新しい理論や考え方が提示され、その考え方がどのような意味をもつのか自分で考えるための課題が提示されています。

③ やってみましょう

このコーナーでは、実際に体験して考えてもらいます。内容によって、最初にまず体験し、「気づく」ためのコーナーと、それまでのコーナーで提示され検討してきた新しい理論や考え方を実際に使って、新たな課題に取り組み、本当の意味でその考え方を理解しているのか、

また自分にとってどのような利用が可能なのかを確認するコーナーもあります。

④ 整理しましょう

新しい知識の意味や、自分の現場での利用方法について整理することができます。

こうしてこの本を通して、新しい知識や情報を得るだけでなく、同時にそれを理解し、応用していく上での基本的な姿勢や能力をも身につけていくことを目指しています。

3. 国内、海外を問わず世界中の日本語教師が同じ教材で学ぶことの意味

前述のような基本的な姿勢、能力は、海外の日本語教師再教育の中から生まれた考え方ですが、これは、日本国内でもやはり必要とされている能力です。日本国内における日本語教育も、以前のような留学生や留学準備のための教育だけではなく、日本在住の外国人やその子弟のための教育など、さまざまな広がりを見せてきました。そして、それは全て個別のケースである場合が多く、日本国内にいても、海外で孤軍奮闘する教師のように、一人で考え、工夫していかなければならない場面も多いことでしょ。また、日本語教師の行き来も盛んになり、国内、国外の両方で日本語を教えた経験をもつ人も増えてきました。今、我々が海外の日本語教師のために行ってきた研修の内容、そしてその中で得られたさまざまな知見を、日本国内も含めた世界の日本語教師のために還元することができたらと考えています。

以上、この教授法シリーズ発刊の意味やその特徴について、国際交流基金日本語国際センターの海外日本語教師研修における考え方とともに紹介いたしました。日本語の教え方はさまざまです。教師の数だけ教え方があるというよりは、学習者の数だけ教え方があると言った時代になりました。教師は一つの固定した得意な教え方を身につけるのではなく、学習者に合わせた教え方を工夫することが求められます。そうした教師の成長を支援するために、これからも研修や教材作成に努力していきたいと考えています。

注1) 文化庁(2005)「平成16年度国内の日本語教育の概要・外国人に対する日本語教育の現状について」(文化庁ホームページ <http://www.bunka.go.jp/>) によれば、平成16年11月1日現在の調査結果から、国内学習者数は、12万8500人と発表されている。

注2) 国際交流基金(2005)『海外の日本語教育の現状－日本語教育機関調査・2003年』によれば、2003年調査結果から、海外における日本語学習者数は、235万6745人と報告されている。

注3) 参考：岡崎敏雄・岡崎眸(1997)『日本語教育の実習理論と実践』